

世界編

演出飾り

ここに神あり ガーゴイル/ストーンヘンジ/ステンドグラス



◀イングランド ストーンヘンジ

ロンドン郊外西に200km、ソールズベリー近くにある。土塁の直径100mのストーンサークルである。建てた目的は今なお不明だが、太陽崇拜所、天文台、ケルト人のドルイド教礼拝堂など諸説ある。何せ古い。ストーンはBC2500~2000年と言われ、その土塁はさらに古くBC3100年と言う。何も無い大平原に忽然と表れているので、空の表情で様相が一変する。空が暗くなると人間はこの前にひれ伏すしかないような感情に陥る。神への畏れを古代人は感じていたに違いない。

古代、ガリア(フランス)からイングランドはケルト人(ガリア人)の住む世界であった。現在はアイルランドだけに押し込まれてしまっているが、カソリックでありながら(アイルランド人はイギリス人を、プロテスタン野郎と軽蔑し続けている)、今なおケルト人の精神は妖精と同居している。森に、川に、魔物や妖精がいるのだ。



▶ガーゴイル(スペイン・メリダの大聖堂)

キリスト教の指導者達は、庶民に教えを広めるのに大いに苦勞した。ケルト人がそうであったように、古い土着信仰を捨てない。そこでロマネスクやゴシックの教会堂を建てる時に、こっそり魔物を仕込んだのだ。雨排水の役目を果たしているものが多いが、民衆は「それなら教会に行ってみようか」と親しみを感じたらしい。



教会での説教にも苦勞した。何せ字が読めない、キリストよりも魔物が怖い。そこで聖書の逸話をステンドグラスに絵解きで示す。絵の情景は鉛の額縁をフレームとし、その中に色付けした鉛ガラスを嵌め込む。大変な苦勞だが、太陽の光を受けて浮



かび上がるステンドグラスの美しいこと。神がそこにおいでになると実感するのだ。更に、高くそびえるリブヴォールトが、さながら深い森の中にある情景を演出する。音響効果も荘厳さを演出。

▶トリニティ教会(イングランド・アボンエイボン)

◀ソールズベリー大聖堂(イングランド、コンサートの風景)

